ダークツーリズムの真価と復興過程

“復興”のさらに先にあるもの

追手門学院大学
准教授　井出　明

はじめに

本稿では、冒頭で近年注目集めるダークツーリズム（dark tourism）と呼ばれる新しい観光形態を紹介する。その上で、「人類の悲劇の場を巡る旅」として定義されるこの営為の特質を掘り下げるとともに、長期的視野に立ったダークツーリズムの価値について考える。

１．ダークツーリズムとはなにか

(1) 歴史的考察

ダークツーリズムとは観光学における比較的新しい概念であり、1996 年に当時グラスゴー=カレドニアン大学の教授であった J=レノンと M=フォーレーによって提唱された。彼らによれば、戦争や災害の跡といった悲劇の場を訪れる現象はしばしば確認されており、こうした観光行動をダークツーリズム(dark tourism)と定義した[i]。

この概念は、ヨーロッパで急速に広がったが、それは第二次世界大戦におけるナチズムの惨禍を二度と繰り返してはいけないという価値観に支えられていた。実際、初期のダークツーリズム研究は、第二次世界大戦やナチズムに関連するテーマが多く見られた。アメリカには、2001 年の同時多発テロ以降急速に広まり、今や一般的に受け入れられている[ii]。アジア諸国では、欧米文明圏に留学したエリートがこの新しい概念を持ち帰った。具体的に地域振興に活用する例がインドネシアのバンダアチェ等で見られる[iii]。中国では、この概念の広まりは遅かったが、今や黒色観光と呼ばれ、注目を集めつつある[iv]。

但し、ダークツーリズムの享受者が増加しているからこそ、実際の態様は真剣に祈りを捧げるものから、娯楽性の強い物見遊山的なものまで、千差万別である。換言すれば、祈りや学びといった価値は、必ずしもダークツーリズムの定義には読み込まれなくなってきている。日本語ではじめてダークツークリズム概念を紹介したフンク=カロリンは、その価値の中心を教育においていたが、筆者は、ダークツーリズムの核心的価値を現場で悼みを捧げつつ、地域の悲しみを承継することにあると考えており、立場が異なる[vvi]。また、近年のヨーロッパの研究では、死生観の問い直しなどにウエイトをおく見解も出てきている[vii]。ただし、こうしたダークツーリズムの価値に関する考え方の相違は、互いに排他的に背反するというわけではなく、相互に併存し、さらには補完しうる関係になることもある。祈りを捧げつつ学ぶということは、何ら違和感がないし、逆に学んだことによって祈りがより深くなるということも考えられる。ここでは、筆者が強調する「祈りと記憶の承継」をダークツーリズムの中心的な意義として論を進めるが、これはダークツーリズムが有する多様な価値の一つであるということも述べておきたい。

(2) 日本における状況

日本では観光は長年、娯楽の一種として認識されており、その社会的地位は大変低かった。観光産業が復興過程において果たす役割についてもあまり掘り下げられることはなかった。しかし、BCP（Business Continuity Plan：事業継続計画）に対する社会的要請が強くなってきていることや観光産業の経済規模が直接波及効果（旅行消費額）だけで約 22-23 兆円もあることから、復興過程における観光産業の位置づけも検討されるようになってきている[viiix1]。2004 年

[1] 但し、ホテル業に関しては、メディア・保険・復興事業等で基本的に被災地の部屋の稼働率は高止まりとなる。これについては、参考文献 ix を参照されたい。交通需要に関しても

の中越地震後は、都市部と山間部の交流の重要性が見直され、観光交流の仕掛けが復興に繋がることも認識されつつある[x]。

しかし、これらの観光産業に関する言及は、一般的なレベルに留まり、敢えて人類の悲しみの記憶を辿るダークツーリズムに対してはこれまでほとんど議論の対象にならなかった。ダークツーリズムと災害復興の関係が取り上げられるのは、2012 年 1 月に公表した拙稿が初めてであった[xi]。その後、観光学の専門家の間で、復興過程においてこの用語を使うべきかという論争が起こり、その余波は現在にさえ及んでいる[xii]。但し、さらにこの後で、井出も執筆に参加し、東浩紀が編集を務めた『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』のベストセラー化をうけて、この概念は 2013 年の流行語大賞にノミネートされるなど一般社会に対して急速に広まっていった[xiii]。

筆者自身は、既に 10 年を超えるスパンで災害復興と観光に関する論考をしたためてきたが、その多くは個別の被災地や戦争の跡をトピックとして扱ったものであり、ダークツーリズムという上位概念を用いて統一的に説明を始めたのは 2012 年からであった。わずか数年で、ダークツーリズムを取り巻く状況に変化が起こっているため、研究を始めた当初は被災者支援を重視していた面があるが、現在では地域の価値の承継が現住の被災者支援と衝突する場面もありうることを認めざるをえないと考えている。

２．ダークツーリズムによる記憶の承継の重要性

(1) いわゆる“復興ツアー”との差異

一般に観光による被災地の復興といえば、中越地震の後の都市部住民との交流による地域振興の効果が知られているが、これはあくまでも明るい未来に向けての復興であり、あえて人類の悲しみの跡を辿る旅であるダークツーリズムの一般的な考え方とは一線を画する[xiv]。ダークツーリズムは、地域の悲劇に焦点を当てるため、慰霊や悲しみの共有という価値とつながりやすく、前向きな要素を排除はしないものの、決して明るくポジティブなものばかりにはならない。その意味で、復興ツアーとは必ずしも一致しない。 但し、だからといって被災地をダーク(dark)と呼ぶわけではない。３．で詳述するが、ダークツーリズムにおけるダークは“悲劇の記憶”を指しているため、ある特定の場所がダークになることはないのである。ダークツーリズムは、いわば、人類史の影の部分を大切に取り扱うことを意味している。例えば、アウシュビッツ強制収容所は、最も著名なダークツーリズムポイントとして知られているが、大量殺戮を二度と起こさないという点だけでなく、「ここで悲しいことが起こった」ということを厳かに受け止め、祈りを捧げる場としても認知されている。

日本の復興ツアーの場合、未来に向かっての希望が強く語られるという特徴を持っていることが多い。確かに「悲劇の現場を訪れる」という意味ではダークツーリズムに分類されるのではあるけれども、通常の復興ツアーは旅の主たる目的として純粋に死を悼み、地域の悲しみを共有するという点を強調しているわけではないため、海外における一般的なダークツーリズムのイメージとは齟齬があるように感じられるかもしれない。

復興を前面に打ち出さないいわゆる“伝統的な”ダークツーリズムは、復興にまい進する地域住民にとっては、あまり好ましくない営為であるかもしれない。しかし、地域の悲しみの記憶をあえて承継することによって、長期的には自然の脅威への畏怖を持ちつつ、災害とのかかわり合いを考えることになるため、防災に関しても資することになる。例えば、遠野物語にまつわる旅は、悲しみの記憶をたどるという意味で極めて典型的なダークツーリズムになるが、その記憶の中には、土木工事の不備が水害を生じさせ、それが飢饉や飢餓に繋がる描写もあり、教訓や戒めとしての役割を果たしている[xv]。

これらの人々が現地を訪れるので、むしろ被災前よりも輸送密度は上がる傾向がある。東日本大震災後の JR 東日本の状況は、こちら（http://www.jreast.co.jp/rosen_avr/）を参照されたい。

また、通常の復興ツアーにおいても、確かに被災した場を巡るのであるが、それは地域の住民が見せたいものを見せるという形になるので、現在その地域に居住する人々が好まないものについては、ツーリストとしてはアクセスしづらいものがある。この問題は震災遺構について、先鋭的に顕在化してくることになる。

（2）震災遺構と記憶の承継

東日本大震災では、震災遺構の取り扱いが大きな焦点となり、この議論は災害の発生から 4 年を経て未だ続いているところもある。遺構の保存が論点となった主な例をあげてみても、宮古市のたろう観光ホテル・南三陸町の防災対策庁舎・石巻市の大川小学校など枚挙にいとまがない。そして、それぞれに独自の背景を持ち、「震災遺構だからこうすべきだ」という画一的な回答を与えることは出来ない。上記三例に関しても、遺構として活用が決まっているのはたろう観光ホテルぐらいで、南三陸町の防災対策庁舎は県の預りとなり、大川小学校に至っては児童の遺族と市との対立が解けず、どうするかという目処がたっていない。すべてがダークツーリズムの対象であるが、本節では、南三陸町の事例に関してダークツーリズム特有の観点から掘り下げておきたい。

南三陸町の防災対策庁舎（以下、単に“防災対策庁舎”と記す）の保存に関しては、地元では反対の声が多い。被災者心情を優先して地元の意向に従えば、撤去はやむなしということになり、事実、現在の町長も撤去を主張して選挙に当選した[xvi]。しかし、町外からの保存を望む声は大きく、町としては撤去に踏み切ることが出来ず、県が当面の所有の方針を打ち出している。この庁舎は物理的なインパクトを受けているだけでなく、職員の献身的な逸話や現在も慰霊の場所として機能している点などを考えると、壊してしまうことは地域の震災後の 4 年間のコンテクストも消滅させることになり、記憶の承継というダークツーリズムの核心からすればいかにも捨てがたい価値を有する。

ダークツーリストが現地を訪問し、外部の目で地域の価値を説くことは、地域の人々が気づいていなかった新しい価値に覚醒させることに繋がる。一般に被災地での復興ツアーといえば、いわゆる“着地型観光”と呼ばれる地域の人々が見せたいものを地元の企画でプロデュースすることが多い。しかし、被災地の復興過程においては地域の人々が好まないものであったとしても長期的な視点から価値を潜在的に有するモノがあり、この覚醒を地元の人々に与えるためにはあえて地域の悲しみの跡をたどるダークツーリズムの方法論は極めて有効である。

(3)　ダークツーリズムの独自性

(i) ネガティブ情報の取得と承継

前節では、震災遺構を素材として、地域の人々が望まないモノであったとしても、記憶の承継の対象として受け継ぐべき価値が有ることを指摘したが、これは建造物のようなハードウェアばかりではなく、抽象的な記憶そのものについても敷衍できる道理である。

被災地の復興は、自然災害としての収束後、麗しい話ばかりで満たされるわけではない。1993 年に津波を経験した奥尻島では復興過程において町長が逮捕されているが、今回の東日本大震災においても、山田町の NPO や石巻市の一般社団法人において多額の不正支出が確認され、刑事事件として立件されている[2][3][4]。また、事件とは言えないまでも、福島第一原発

---

[2] 1993 年の北海道南西沖地震で津波の大きな被害を受けた奥尻島は、早い段階から復興バブルが起こった。島外から公共事業に関係する多くの業者が来訪するとともに、その景気を当て込んで新たに酒場を含めた飲食店が開業した状況は東日本大震災にも重なる。奥尻島は、「完全復興」を宣言するまでに 5 年弱を要しているが、復興事業が進展するにつれ、当時の町長と出入りの業者の癒着が指摘されるようになっていった。その後、地震から 6 年半を経て、町長は競争入札妨害で逮捕されるに至った。（2001 年 02 月 02 日朝日新聞朝刊東京本社・３ページ「癒着の深み、おちた町長　奥尻島ゆがめた復興利権（検証）」等を参照）

[3] 山田町では NPO 法人大雪りばぁねっと。が 6 億円を超える不正な支出を行い、町から損害賠償請求を受けるとともに、その一部は刑事事件となり、代表らの逮捕に至った。（2014 年 02 月 05 日朝日新聞岩手全県・27 ページ等を参照）

[4] ボランティアの受入を行っていた石巻災害復興支援協議会の代表者は、同時に民間企業である藤久建設の代表取締役も務めていたが、同社はがれき処理を市から請け負ったものの、その一部の処理を無償ボランティアに行わせ、委託金の一部を横領するという事件を引き起こした。代表者は、復興関係の多くのイベントで講演などの活動も行っていたし、その一

の事故の避難者が受け取る補償金を巡り地域内に軋轢が生じているし、先述の大川小学校をめぐる一連の係争については、インターネット上に膨大な罵詈雑言を確認することが出来る[56]。

こうした状況は、厳然たる事実であって復興過程において地域が乗り越えていかなければならない壁であるが、通常の被災地の訪問では復興過程におけるポジティブな光の部分だけが強調され、ネガティブな部分の実相はなかなか語られることがない。ヨーロッパで発達したダークツーリズム概念は、西洋文明が根源的に有する“光と影”の二元論的世界観を大切にしており、地域やコミュニティのダークサイドも伝えるべき情報として認識している[xvii]。例えば、アウシュビッツ強制収容所の博物館では、ユダヤ人達の内部的な裏切りについても詳しく説明されており、全てをナチの責任に還元する訳ではなく、多面的な人権侵害の状況が学べるようになっている。

ところが、被災地を始めとする我が国のダークツーリズムポイントは、巨大インパクトの後に生じる様々な社会の軋轢や矛盾に関してはほとんど触れられずに、資料館の展示やツアーが構成されている。これでは、訪問を物見遊山のようなものに貶めてしまう危険性がある。被災社会の実相は、ポジティブな面とネガティブな面の両者を当然ながら持つわけで、来訪者に両方の面を伝えることで地域に対する深い理解を呼び起こすことが出来るはずである[xviii]。

日本では、この種のネガティブ情報を扱う展示が非常に少ないのであるが、水俣市立水俣病資料館や富山県立イタイイタイ病資料館では、地域のコミュニティ自体が崩壊したことに言及しており、医学的な展示を超えた発生後の社会について取り扱っている。特に、水俣については、“もやい直し”と呼ばれる人間関係の再生運動が展開されていることも詳しく紹介されており、社会的荒廃と地域の回復の過程を考えることが出来るようになっている[xix]。

ダークツーリズムは地域のネガティブ情報を扱う観光形態であり、ダークツーリズムに対する国内の理解が深まることで、前述の地域史の負の部分がアーカイブ化され、地域を多角的に見る動きが深まることが期待される。

また、地域のネガティブ情報と関わり合いになる立場として、ツーリストという身の置き場所は実は積極的な意味さえ持っている。東浩紀は、観光に訪れる訪問者と現地との関係を「弱いつながり」と呼び、観光で一時的にそこに滞在するだけの関係である以上、ある意味「無責任な」存在であると位置づける[xx]。仮に、ボランティアとして現地と「強いつながり」を持ってしまった場合、地域のネガティブ情報は扱いにくくなるとともに、地元とのしがらみも強くなり、これが情報の流通性を妨げる。前節の石巻の横領事案はボランティアの大量投入が直接の原因となっているが、逮捕者はボランティアの取りまとめをしていた人物であり、そこには太くて強いつながりがある。土地の人になってしまうと、地域のネガティブ情報を伝播しにくくなるとともに、地域のパワーバランスに巻き込まれることになるため、地元政治からニュートラルでいることは難しくなってくる。しかし、観光という“弱い

方で市との強いつながりを指摘されていた。なお、石巻復興支援協議会は、震災の翌月から稼働し、その翌月である5月に一般社団法人化されている。（2014年10月31日朝日新聞宮城全県・27ページ等を参照）

5 福島第一原発事故の避難者が多く暮らすいわき市では、東京電力からの補償金を受け取る人々と、ほとんど補償のない地元の津波の被災者との間で感情的な対立があり、市役所に「避難者帰れ」などのスプレー落書きまで現われた。補償金を元に、パチンコ屋に入り浸る避難者もおり、地域の軋轢は大きくなっている。また避難者同士でも元の居住地の位置によって賠償の額に差が付けられ、その意味でも地域の一体性に暗い影が投げかけられている。（2014年03月02日朝日新聞朝刊東京本社・1ページ等を参照）

6 2015年3月11日の政府主催追悼式に登壇した石巻の被災学生のスピーチは国民に大きな感銘を与えた。しかし、その直後から、インターネット上には誹謗中傷や公職に纏わる親族の個人情報の暴露が溢れ始め、本稿執筆時の2015年5月8日においても、個人名の検索結果の上位には、多くの悪意のある記述を含んだまとめサイトが並ぶ。その中には、大川小学校の保存に触れたものも数多くあり、個人のウェブサイトやブログにリンクが繋がっている。問題なのは、この種のサイトに、対立する人々を罵る表現が目立つ点である。本稿では内容の真実性については言及しないが、コミュニティの一体性が確保されているのかという観点から関連するWEBを概観すると、非常に厳しい状況にあることが推察される。

つながり”は、自己の立場を固定化させる必要もなく、対立する立場のどちらかに与す必要もない。無責任な立場であるがゆえに行動の制約も少なく、いろいろな人達にさまざまな話を聞くことも出来る。もちろん、礼節やタブーに対する意識は必要であるが、地元の人々もしがらみのない立場である観光客には自由な物言いをすることもあり、これは公式行事における交流では得られない反応である。記憶を承継する方法論は、当然のことながら旅以外にも文献の精読、エスノグラフィーの作成、建造物の保存など多岐にわたるが、旅、特にダークツーリズムが持つ特有のポテンシャルとして、「弱いつながりであるがゆえのネガティブ情報の取得と承継」については、特に強調しておきたい。

(ii)死生観の涵養

ダークツーリズムが一般化することによって、社会にもたらされる別の効用として、死生観教育についても言及しておきたい。前掲 Stone(2012)でも述べられていることであるが、ヨーロッパ文明は元々メメント・モリ（死すべき運命観）を有しており、それを前提としていかに生きるのかを考えてきた。近年では、従来身近であった死がどこか縁遠くなっていることもしばしば指摘されることもあり、ダークツーリズムが死生観を育むことに有用ではないかという指摘もある。我々は、通常の日常生活において、死を意識することは乏しく、また、命の大切さに感謝をすることもあまりない。しかし、死の現場を直接に扱うダークツーリズムでは、非業の最期を遂げたケースに触れることが多いが、この経験は自分の生への感謝につながりうる。そして、今ある自己の生への感謝は、より広範な社会への積極的な関わりへとつながっていく。

日本の防災教育は、生き残ることの重要性を教えるため、死を否定的に捉えやすくなってしまう。死が持つ崇高さや死者への畏敬の念を育むことが疎かになるが故に、死ぬこと自体が何か悪いことのようになりかねないのであるが、これは果たして良いのであろうか。例えば、被災地ツアーに積極的な宮古市では、2014 年末の段階で、たろう観光ホテル周辺への視察は行われているが、その内容として死者への悼みをどのように捧げるかという観点からのコンテンツは整備されていない。

死の現場を直接に扱うダークツーリズムという営為は、いかに生き残るかという命題よりも、死をどう考えるのかという省察に繋がりやすい。死とは何か、わたしはなぜ今生きているのか、無念の思いはどうなるのかなどいった思索は日常生活ではなかなか考える機会がない。こうした体験は、大量の死を経験した被災地に赴き、地域の持つ死の経験と対峙して可能になるため、ダークツーリズムには、いわゆる被災地ツアーや他の観光形態と異なる独自の意義が存在していると言えよう。それは紛れも無く、死生観の涵養であり、人生の最期の有り様を考える上で、ダークツーリズムという形で被災地を訪れることは、旅人に重要な機会を与えることになる。

３．用語の適切性

本章では、ダークツーリズムという用語の適切性について、再検討しておきたい。

(1) ダークツーリズムにおける“ダーク”の意味

1996 年に、レノンとフォーレーが dark tourism という用語を発案する以前から、war tourism や disaster tourism などと呼ばれた観光のカテゴリーは存在していた。彼らが慧眼であったのは、戦争や災害にまつわる場を個別に捉えるのではなく、悲劇の現場に関連する観光行動に共通性を見出そうとした点である。人類史上、戦争や災害だけでなく、大量殺人、社会差別などなど様々な悲劇が繰り返されてきたが、その悲劇の場を訪れる営為を dark tourism と総称して名づけた意義は大きい。それぞれの人類の悲しみには、共通項と相違点があり、これらを照らし合わせることで問題への理解が深まる。

筆者にも責任の一端があるのだが、日本では、東日本大震災後の観光による地域復興の方法論としてダークツーリズムを紹介したため、被災地が dark な場所であるとの誤解が一部に起きてしまった。もっとも、

この誤解に関しては、ダークツーリズム関連の論考をまったく読まずに、感情的に「被災地をダークと言うとは何事だ」と言い出す例もあり、議論を深める事自体が難しい場合もある。ダークツーリズムが対象にしているのは、人類史の影の部分であり、これはどのような地域であれ必ず有していると言って良い。その影の部分は、前節で見たように、教訓として意味を持つこともある一方で、単にそういった出来事があったことを知っておくだけでも悼みや記憶の承継として意味がある。また、地域を多面的に深く理解する上で、その地域の様々なダークサイドを視ることは重要であることも既に述べた。確認のため強調しておくが、ダークツーリズムは被災地をダークと呼ぶのではなく、人類史の悲しみを影の部分（＝ダークサイド）であると捉え、その記憶と結合した場所を訪れるからこそツーリズムとして成立していると考えている。

日本においては、こうした影の部分は隠蔽されがちであるが、近年、小林多喜二の「闇があるから光がある」が評価されるなど、ダークサイドの重要性について再考する論調もあり、ダークツーリズムが提示する価値概念は重要な意味を持つことになることが期待される[xxi]。ダークツーリズムに替わって、ホープツーリズム等の言葉を使えない理由は、ダークサイドに置き換えがたい固有の価値が存在しているからに他ならない。

(2) 国際的連帯の重要性

ダークツーリズムは、もはや海外では一般化した概念であり、アカデミズムだけでなく事業者においてもこの用語を使うことが多い。冒頭で紹介したバンダアチェは、復興過程を観光業がけん引し、その際ダークツーリズムがキーワードとなった[xxii]。ダークツーリズムが被災地間のネットワークを構築する場合、国際用語として通用している“dark tourism”を排除して、日本でのみ異なる用語を使うことは、相互理解の観点からロスが大きい。むしろ、日本側で学術用語としてのダークツーリズムを正しく理解することが重要であろう。

また、ダークツーリズム概念は、国連のユネスコによる世界遺産認定においても重要な役割を果たしている。広島のいわゆる原爆ドームは、ダークツーリズムの教科書において必ず触れられる事例であるが、世界文化遺産として固有の価値が認められている。ダークツーリズムポイントとして、こちらも必ず教科書で言及されるアウシュビッツ、そして他にも南アフリカのロベン島[7]なども世界文化遺産として登録されている。要するに、ダークツーリズムという用語と世界遺産という概念が守るべき価値の間には、もはや分かちがたい結合が生じていると言って良い[xxiii]。とすれば、ダークツーリズムという言葉を避けて、いわゆる“負の遺産”を世界遺産やそれに類似の制度で後世に承継することは現実的な選択ではなくなっている。ユネスコのシステムと dark tourism なる旅の概念が結びついている以上、それを認めた上で被災地の復興を考えることが肝要であると言えよう。

４．ダークツーリズムが持つ視座と視野

防災の研究者は、自然災害で生じた悲しみには敏感であり、被災地の思いを大切にするが、事件や事故そして戦争といった別の原因で生じた悲劇に関しては、あまり関心を示さない。しかし、地域の悲しみを鳥瞰的にとらえた場合、自然災害とそれ以外の事件や事故などいった悲劇の発生要因を区別することは、地域の全体像を捉える場合に適切ではない。

２．(1)では、遠野物語に関して触れたが、水害の発生と飢饉やその後に発生する間引き(嬰児殺)との間には関係性があり、遠野の悲しみを理解するためには、相互の悲劇の連関を俯瞰的に視る必要があろう。他の例としては、日本の公害問題の原点といえる足尾銅山事件は、産業の問題と思われているが、渡良瀬川流域における水害が上流から運ばれてきた鉱毒をま

---

7 ロベン島は、南アフリカのアパルトヘイト政策の象徴のような島で、黒人として大統領となったネルソン＝マンデラも 27 年間収監された。現在は、同国屈指の観光資源として、南アフリカ共和国観光局の公式サイトで紹介されている。(http://www.south-africa.jp/MeetSouthAfrica/?index=5 参照 2015/05/08 確認)

き散らしたことによって深刻化した[xxiv]。また、第二次世界大戦末期、秋田県で起きた中国人強制連行者への虐待事案である花岡事件は、単なる強制労働の問題ではない[8]。花岡川は当時、度重なる氾濫を起こしていたが、鉱山での操業を効率化するためには川を土木工事によって作り変える必要があり、その過程で虐待行為が行われた。但し、その背景には戦争の遂行という国家目的が横たわっているわけで、この悲劇は、戦争・水害・強制労働などが複雑に絡み合う。

近年の事例で言えば、阪神・淡路大震災において、大きな被害を被った長田区に関し、「木造住宅が密集していたところに犠牲者が多かった」という説明はなされるが、なぜ多くの人々が木造住宅に肩を寄せあって暮らすことになっていたのかというコンテクストは、神戸市立博物館でも人と防災未来センターでも言及が乏しい。そして東日本大震災を論点とすれば、福島がなぜ原子力発電所を引き受けなければならなかったのかということを多面的に考えることは、地域の悲しみの根幹の近づくことになるが、この面に関する考察も未だ不足している。

つまるところ、自然災害はそれ自体が悲劇であるというだけでは、地域の悲しみの本質を捉えきれなくなる可能性が高い。３．(1)で述べたように、ダークツーリズムにおけるダークとは、悲しみの記憶を広く対象にしている。単に被災地ツアーや復興ツアー、そして歴史観光などといった単一目的の周遊では、その場所が経験してきた過酷な地域の歴史とそれを乗り越えてきたダイナミズムを実感しにくい。戦争、災害、事件、事故、差別、貧困などといった人類の悲しみの記憶を包括的に扱えるダークツーリズムという方法論は、単に旅を楽しむといった話ではなく、地域を深く理解するために有用な接近手法なのである。

さらに、ダークツーリズムの方法論を用いて複数の地域にアプローチをした場合、一見関係がないと思われる複数の地域の悲しみを比較すると、そこに構造的な類似性を発見できるという利点もある。例えば、水俣産の玉ねぎは九州では非常に上質であることが知られているが、東京起点の放送では、風評被害にさらされたことがある[xxv]。これは、福島の農産物に関する評価と重なるところがあり、人間が持つ“偏見”というものの業の深さを感じさせる事案である。一般消費者は科学のレベルでモノを買うのではなく、別次元のマーケティングが必要であったことは、既に水俣が示唆していたのである。また、足尾銅山の鉱毒で全村移転を余儀なくされた旧谷中村の住民の一部は、北海道は佐呂間への移住に活路を求めたが、ふるさとへの帰還の問題は子供の代になっても続き、一筋縄ではいかないことがわかる。これは福島第一原発の事故に関連する避難と帰還の問題を考える上で、長期的な視野に立つことの重要性を教えてくれる。ツーリストとして悲しみの現場を訪れることは、自己の内面の中に点として存在していた知識を結びつけ、社会を構造的に理解することに寄与する。

もう一歩踏み込んだ関係性の構築として、ツーリストは現地への気付きを与え、地域の人々にダークサイドの価値を認識させるきっかけとなれば、それはなお一層の価値を持つ。これは、悲しい記憶を持つ地域の新しいイノベーションに繋がる可能性もあり、ダークツーリズムが単なる趣味の旅行ではないということを意味してもいる[xxvi]。

おわりに

ここまで、ダークツーリズムという言葉の定義に始まり、この新しい方法論が有する価値について記憶の承継の観点から考え、さらに用語の適切性についても再検討を行いながら、この旅でより大きな鳥瞰的な視野と視座を得られることを述べてきた。今後、ダークツーリズムが普及・定着していくためには、人々の心のなかの共通意識として、どこの地域にも必ず存在す

[8] 1945年6月30日（7月1日説もあり）、花岡川・大森川の改修工事を請け負っていた鹿島組から強制労働に就かされていた中国人労働者達が蜂起し、集団脱走を企てた事件。約800人の逃亡者がでたが、ほぼ全員が逮捕された。事件前から日本に移送されていた中国人は、986人にも上り、その内418人が重労働や事件の影響で死亡した。戦後、事情が明るみに出ることとなり、BC級戦犯として関係者の処罰が行われた。（秋田魁新報社『秋田大百科事典』1981年を参考に記述。）

るダークサイドに関する記憶の承継の重要性が認識される必要がある。様々な悲劇は決して忘れ去られる対象ではなく、大切な記憶であるとともに、そこにしかない地域資源になりうることを強調して稿を閉じたい。

参考文献

[i] Lennon, J. J., & Foley, M. (2000). Dark Tourism. Continuum.
[ii] Sharply, R. & Stone, P. R. (2009). The Darker Side of Travel -The Theory and Practice of Dark Tourism. Channel View Publications.
Sharpley
[iii] Rahmadhani, M. Bus. (2014). Menuju Industri Pariwisata Aceh Berbasis Bencana, Dinas Kebudayaan dan Pariwisata Aceh.
[iv] 井出 明. (2014). ダークツーリズム入門(#4)日本型レッドツーリズムの可能性. ゲンロン通信, 11, 67-79.
[v] フンク カロリン. (2008). 「学ぶ観光」と地域における知識創造(「知識・学習」と地理学,2007 年度秋季学術大会シンポジウム). 地理科学, 63(3), 160-173.
[vi]井出明.(2013). ダークツーリズムから考える, 福島第一原発観光地化計画, ゲンロン. 144-157
[vii] Stone, P. R. (2012). Dark tourism and significant other death: Towards a Model of Mortality Mediation. Annals of Tourism Research, 39(3), 1565-1587.
[viii] 国土交通省 観光庁.(2014).旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究報告書,2012,6
[ix] 井出明, 渡部邦彦, 関口伸一, & 徳野浩司. (2006). F-8. 災害過程における観光産業の位置づけ(F.一般セッション,第4セッション,一般論文発表). 地域安全学会梗概集, (18), 79-82.
[x] 清野 隆, 川澄 厚志, 青柳 聡, & 古山 周太郎. (2011). 震災復興期に長岡市山古志地域の農産物直売所が集落再生に果たした役割:地域住民と来訪者の意識に着目して. 都市計画論文集, 46(3), 157-162.
[xi] 井出 明. (2012). 東日本大震災における東北地域の復興と観光について : イノベーションとダークツーリズムを手がかりに (特集 震災復興と観光). 運輸と経済, 72(1), 24-33.
[xii] 信治郎大森. (2012). 「復興ツーリズム」或いは「祈る旅」の提言 : 「ダーク・ツーリズム」という用語の使用の妥当性をめぐって (特集 東日本大震災と観光). 観光研究 : 日本観光研究学会機関誌, 24(1), 28-31.
[xiii] 東浩紀編著. (2013). チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド. ゲンロン.
[xiv] 澤田雅浩, 石塚直樹, 高野智恵, 日野正基, 西澤卓也, 三井健, … 平井邦彦. (2010). 中越地震5年目の報告-NIDと地域の関わり方-. 長岡造形大学研究紀要, 7, 129-142.
[xv] 畑中章宏. (2012). 災害と妖怪 : 柳田国男と歩く日本の天変地異. 亜紀書房.
[xvi] 保存か解体か 遺族複雑. 北海道新聞. 2015 年 3 月 11 日夕刊.10
[xvii] 井出明. (2015). 次世代観光情報システムの目指すべき方向性(セッション3). 情報処理学会研究報告.CH[人文科学とコンピュータ], 106,印刷中
[xviii] 井出 明. (2013).プロジェクト エコー・シティ～地域への共感を呼ぶ「ダークツーリズム」.日経アーキテクチュア,1003,8-9.
[xix] 井出明.(2013).日本型ダークツーリズムの可能性 ―-戦争・災害・環境の視点から―-,観光・余暇関係諸学会共同大会学術論文集, 4,9-15.
[xx] 東浩紀. (2014). 弱いつながり : 検索ワードを探す旅. 幻冬舎.
[xxi] 荻野富士夫編. (2009). 小林多喜二の手紙. 岩波書店.
[xxii] 井出 明. (2013). ダークツーリズム入門(2)バンダアチェ. Genron Etc. = ゲンロンエトセトラ : コンテクチュアズ友の会会報, 8, 62-71.
[xxiii] Mowatt, R. A., & Chancellor, C. H. (2011). Visiting death and life: Dark Tourism and Slave Castles. Annals of Tourism Research, 38(4), 1410-1434.
[xxiv] 櫻井 正明. (2011). 足尾銅山周辺における森林流域の荒廃と復元. 砂防学会誌 : 新砂防 = Journal of the Japan Society of Erosion Control Engineering, 63(6), 59-65.
[xxv] 沢畑亨. (2005). 森と棚田で考えた : 水俣発◎山里のエコロジー. 不知火書房. 161-163
[xxvi] 井出明.(2013).ダークツーリズムと地域イノベーション. 進化経済学会論集, 17, PaperID B-1